

行動することで見えてくるもの

3月11日(金)14時46分、マグニチュード9.0、震度7という日本での観測史上最大の地震が発生しました。地震により大津波が発生、東北地方太平洋沿岸に押し寄せ、3万人に近い死者・行方不明者が出るという大惨事で、東北地方太平洋沖地震と命名されました。

地震発生直後から、すべてのテレビ局では、高い防波堤を大きく乗り越え住宅地へ洪水のような勢いで押し寄せ、家々を破壊し、さらに、奥へと押し寄せる津波の瞬間を1日中放映していました。

亡くなられた方のご冥福を祈るとともに、家を流され家族を失われた方々の再起を祈り、今、自分にできる支援を精一杯行うことが私たちにできることではないでしょうか。

さらに、安全とされていた原子力発電所にも、地震と津波の破壊力は、容赦なく襲いかかり、放射性物質漏れ事故、大規模停電が発生し、近隣の住民は避難を余儀なくされ不安な毎日を送ってられます。また、学

校の体育館等で4月13日現在、13万人を超える人たちが避難生活を送られています。

その中で中学生や高校生が主体的に、支援物資の運搬をしたり、掃除をしたり、お年寄りのお世話をしたりして、避難所の自主運営に大きな力を発揮している様子を、テレビで見て大変感動しました。水や食料も少なく、暖房も十分でない不自由な避難所生活の中で、若者たちの積極的な行動に避難所の多くの人が勇気づけられました。協力すること、仲間を信じることで、お互い苦しい避難生活の中から何かが生まれ、被災者同士繋がりができ、生きる希望を持たれたことと思います。

自衛隊をはじめ、消防士、医師、各国からの機材や復興支援隊の派遣、多くのボランティアの活躍をテレビを通して知ることができました。

また、国内外からの募金や義援金、応援のメッセージ、生活に必要な物資の支援がありました。益城町でも役場玄関に設けられた支援物資受付には、



役場に寄せられた多くの支援物資を被災地に届けるため仕分ける職員

多くの皆さんから「こころのこもった物資の提供がいっぱいありました。」

何かしたい。少しでも役に立ちたいという多くの人の気持ちには全国に広がっています。

被災地では一瞬の間に多くの人の命が失われました。一つしかない大事な命、私たち、一人ひとりが、かけがえのない存在です。お互いの違いを認め、個性豊かで、誰もが幸せであり、安心して暮らせる人権尊重社会を目指し、傍観者ではなく、自分でできることを行動に移すことが大事なことでと学んだように思います。

「こころは見えないけれど『こころづかい』は見える」「思いは見えないけれど『思いやり』は見える」

お互いに傍観者ではなく、行動することで見えてくるものがあると思います。

益城町教育委員会

ふるさとの地名漫歩

歴史の変遷と地名

333

矢嶋姉妹周辺⑧

だがただ一人、平成10年1月に出版された『白いリボン』

(矢嶋楯子と共に歩む人たち)の著者である間野絢子氏は、2度七郎の孫の林国雄氏を訪問されました。大正12年1月、矢嶋楯子伝が出版されて以来初めての作家の取材でありました。この中で「矢嶋楯子の名が高まれば高まるほど、林七郎の立場は悪くなる。地方の名士にとっては辛いことである。(伝記その他で、七郎の酒乱がもとで離婚した、と書かれますが、七郎は立派な人物であつたと本家の者が言っています。明治10年の西南戦争で敗れた西郷隆盛が木山に陣をとつた時は、単身馬を駆り、西郷を励ますなど、維新の志士達とも親交も厚かつたそうです」と書かれています。事実、小楠の弟子で実学党の一人として何らかの交流はあつたことでしょう。

また「林国雄氏は七郎の4人目の妻ノチさんの孫で、世間に植えつけられた七郎の汚点の草を取るために一心に生きた人である」しかし、別に「楯子ほどの人だ。仮に相手

が七郎でなかったとしても、…家庭にのみ納まり切れなかつたであろう」とも。

鶴子が姉妹に与えた儒学を基礎にした家庭教育は、日本の女性史上大きな業績を残す人物に育てあげました。「朽木は雕るべからず」という孔子の言葉があります。朽ちた木に彫刻はできない。心の腐った人間は教育することも出来ない、弟子の宰予(さいよ)を批評した言葉ですが、鶴子にとって我が子とは言え、矢嶋姉妹は手応えのある優秀な弟子達でありました。平成7年7月の読売新聞はギリシャの国会議員が武士道の精神と、ギリシャの精神が共通するとしての出版を報じました。

益城町文化財を訪ねる会
会長 松野國策



津森小校庭にある矢嶋楯子の顕彰碑